

Inches

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

Centimetres

Kodak
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



貞操婦女八賢誌八編中

713
2913
25



0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

JAPAN

TAMBA

へ13
2913
25

特

昭和九年
七月六日
晴末

貞操婦女八賢誌

村田

東都

爲永春水編次

第四十九回

一浮一沈小人時有之
白刃舌乃何方最強き

自前説已前戸塚大六ら有女太郎等ふ締殺さる皆自籠の
入るて庭先なる彼逃水へ押流さるる名ふ聞へる
早瀬ゆふ矢をばくどく我十町り多きくて行くやどふ
其夜も既ふ明る頃稍秩父根の程近き野末の小川ふ
いふろくとき岸辺ふ高く生茂る一其ふ葛籠を堰留るる

女八賢五輯の五

一〇一

流きもやうでわりの一とさ岩鞍典物いんりやうの見出さみで思義しぎの
換か生せいまま為いううりりとと身みのの赤せ裸らぬぬるるののそそうう典てん物ぶつののか
生せい置ちとと又またをを拔ひてて砍きりりてて蒐しゅうりり勢せいひひ逃にぐぐ道みちををささも
奸けん智ちのの蘭らん一い大だい六りくのの糸いと渠かがが奴ぬ僕ぼくぬぬららんんととままをを詞ことばを
巧たくまままのの勅しやく解かい一いくく典てん物ぶつ了りょうみみ忿ぼんりりををおおままらら岩い鞍あんのの里さとへへははひ
はは風ふう呂りよ焚たきくく役やくををどど吩咐ふつけけるる儲たくわんももままままのの前まへ巻まきのの編あ次じ
だだるる度どらら再またびび這こ行ぎのの脱だつ出しゅつせせらら大だい六りくがが度どをを綴つららんんと
ままるる其その端はた括くわくめめ引ひららりり有ありり有ありり如ごとくく一いくく大だい六りくをを典てん物ぶつがが家いえの
苗ならら且かつ風ふう呂りよ焚たき漢かん子こととりり一い度ど心こころのの快たくくななねねどどもも今いま更さら

這こ家がをを逃にれれ去さりり逃に水みづのの里さとへへののううらら一いととてて俺われをを殺ころせせ一
賊ぞく婦ふももがが何なん時ときままををううららくく那あの野のののああららんん家いえもも家いえ財ざいも
售う代だいかか一い貯ちへへ置おきき一い金かねののちちもも本ほん身みひひ去さららしし今いまののちちも
行ゆ法はふもも知しららずずととりりららんん并ならばば知しららずず一い錢せんのの貯ちへへも
ままささ身みひひととららでで何なん困くわんををささううてて行ゆるる言ことば須す史し此この家いえのの養やしやう三
折おとと見み合あいい典てん物ぶつがが貯ちへへととるる金かね銀ぎんをを竊ひそくくふふ物ぶつとと走はり
ままのの丈さかをを盤ばん纏ちんぬぬ賊ぞく婦ふももがが行ゆ法はふをを尋たづねねてて恨うらみみをを報むかへへん
命いのちののゆゆててもも處あらら女に們らがが顔かほのの似に氣きななくく太たい膽たんをを我われのの色いろ
香かほのの心こころ惑まどひひ欺たぶららししとともも口くち惜あけけままとと思おもひひ不ふ楽らくててもも後あと悔くわいの

女八賢五輯の五

亮あきらの立たちよりのうざれば日毎ひごと風呂場ふろあををうろく一兩日と
暮くせし或日あるひ一個の侍女しよがひらきけり走り来て大六おほむの
打うち討ひひお湯ゆの加減かへんがよぬるるばお安やすさぬが浴ゆとのり心こころを
付つて焚たきのえと言いふ大六おほむうち安やす頂かみお湯ゆの加減かへんへ今いまが極上ごくじやう
放はなぐ浴ゆさせ申まをすべしと言いふと後うしろろふ團ま捨すてりの侍女しよの走は
りく迹あと見み送りて大六おほむ其その辺へ行いき寄よせ衝つと立たけり湯ゆ
の用もち扉ひらかき明あけ焚たき場ばの方かたへといりしが色いろ好このきなる
癖くせもどく肚はら裏うらの思おもふ申まをすお妻つまさぬと作なりて言いふの奈ない
何なにも女めもどく顔かほ見みて呉くんと獨ひとり領うりき壁かべを隔へて

俣まやど小こ躰たて入いり来きり一個の處女ぢよはらひ来きり侍しよ女に
居ゐる風呂ふろの蓋かき取り退ひりさせ速はや浴ゆする花はな子この父ちちもどくと
男おとこにど風呂ふろの加減かへんの支し齊せいせて湯ゆ口ぐちよりして覗のぞくと
おもむき顔かほを見み合せし日ひ外そと俺おれと締ち殺ころせし那あの鳥う羽は
玉たまめてありし六む愕おどろ然しとて狭せまき怒いかりおの目め賊ぞく癖くせめ
眼まなこその一念いっしん喰くひ殺ころしとも呉くんむと憐あはれにを押おしあけ
まうと洋やうくくと思おもひ見みるる我われ一旦いつたんの念ねんをふせ候まを冷ひや道ち
奴やつを殺ころすとも奪うばひまうと金きん銀ぎんを取とり返かへさるのまうと
品しんのよめと典えん物ぶつが美み妙めうせりて取とり囲いみ此この身み小

大賢五輯の五

つやまらりりとも言ひまじき須臾怒りを堪忍び
折と現ひ為羽王をひそく殺して恨を晴さんとの
言へ現在俺妻と他の側妻とさまじくするのまじき
入る湯と阿容とと焚くといふ所の面目どとおもへ
狭く腹哀しく左と右とやせんと思按ぬ胸の
塞がりて雲時躊躇そのうち小鳥羽王遠く真城を
知りけんそらくあしと風呂よりわがり母屋をさうてのり
あつた忽地望とを失るひしが命もめても鳥羽王の
は家の養ひは側女とまじくするつらん那侍女を敷て

明公の海に具さふ紛明るらん怒うとやくと思按ぬ
ふ便宜の折を現ひ或日件の侍女を人をもさ方へ
寄せうら合嘆り儲言ふや我等もを願ひ家へ来
風呂焚漢子とるりしつら内形の勢いあつねども
か湯み浴とるお妻さぬの羨しき京鎌倉を尋ねても
多く湯がたれた艶女もるが彼お妻のゆ頃より
おのをも蜜うめおしへてゆはまと言ひて件の侍女
お公さくうち嘆て然う思つても先理るらど私も妻
情由の知らねどおん身の此家へ来ぬし其次の日の

と
夏より一が岩鞍山の時めて思ひがけきく出會しとて
えな
旦那せとてども門生荒が彼姫女を侍らひ其夜より
そて側妾とあり寵愛日夜み跡増ゆぞお妾さうぬと
私等も七羽人のころ遊遊いよ永の夏の日小羊時居眠
ひとりまる間のさきいとくさそを察してとてよの言はる
秘りせ人なる浅一のひそと善悪るま口とて侍女の
我言ふ夏のこと言ひ捨てるをさうてぞ馳まのける徳も
戸塚大おの猶疑ひの晴かたど左ても右ても鳥羽玉と
殺して恨を報ねば我此思ひの晴ごとく望にも用は

場へ来り夕が晴の陰を陰術ありと思接をるり候程の
夫より後の鳥羽玉も心お怖しとてさやあけんさうに
一度も浴をせ夏ふりうりて大六も右に浴をせ夏ふり
余とて止ま夏かゝねば猶も候宜を寝ふゆと五月も
時う空の暮れて暑さの堪ぬ水元月の十日よりあまの
頃或夕暮の鳥羽玉の昼の暑さを冷さんと侍女をさ
後金獨り庭下鉢溜りし折しも移る泉水の月を
眺めらうくと那方の筑山登り越へ母金へ遠く遊地
別室の縁側みゆわく腰うち掛携へ来りし雲扇

女八賢五種の五



の七稀の寄る来る致せうら拂ひ夜風ぬ肌を吹せ
は須臾憩ふ折とそわは脊丈の伸ひしき條の陰
より出る一個の僻者最垢潔しむ試めて頬冠しし
現の寄るに縁て準備の出及庖丁を腰とさざりて抜出
忽地声をとり立て賊婦烏羽玉覺期せよ大六あるを
嘔びくけり吹りて蒐るを烏羽玉は嘘とたろり打ち
狭き右と左ア身とくく。其俺が良夫で在るら
マアく俣つくと声くろを這方の更ぬ耳ふもくけりぞ
後破りあがる大六が双の下を潜り抜けお膳の立の先

理りねど是ゆの深き情由あり私小一言のりせうら
吹とも突ともお前の隨意須臾怒了を和らげて仔
細を聞て下さりませと勸解を聞き大六を首を左右の
打掉りて憶巧もさり偽言より恨令らむと言ふと
其甘口ゆきせらる大六まぬと思ふら空るゆいぶと
覚期せよと言ひゆきませのやひらもを及のむに烏羽
玉の這の竹分り戸塚ぬ一恁ても疑ひる不晴れど
是見て私が赤心を推量して之俺が良夫と言ひも
終るに懐より縁て流備や為さるけん帛紗の色

一品を身隠し出して大六が今破りなけんと振らあび
拳を同ぢけて打つらるを大六もさるまで身せひわり左もに
丁と受曲りて六の来るぞと言ひるるに投返さんとさる
折しも帛紗の結びぬ稍解けて中よりさるる三百
餘両はつとあどろく大六を要時保きて白眼する
顔うち視中り鳥羽王が南戸塚の大人大六よ言ふも
面をさるる五月の某の夜小悪あるお前小寇
せりも素より私が公う思ひ起せし復るるまで律永く
さし聞ては妹お有女の縁てよりお茶もわけて居らる

通の秘がなれたる異母の養子たる妹でりし人の難養と
て見おがらるる私に思ひあつらふおまも妹まもて遊
水多るお茶のお家お養ひは二二日と過るうちあつる夜
妹が私お討ひお家の主大六をとお前の母公の愛嬌振を
竊に討て立退し彼處太郎が兄をさしお父のまも
ゆるぞしと母公の討り其折れも助太刀せしと隠れ
企まれば遠奴も敵の片割れ竊小殺しと母さんの恨
まを晴しおらば不孝の罪の免るまもと言きてお
胸はさしお付磨りしと駄くのそ更にお思按も出さる

女賢五輯の五

公の中に思ふ事候令難言にありとも必死を救われり
 の世に三世の契約もせし人と云ふ候しと申す殺まらばま
 異言も現在母まんの誓とありて此後亦付も果さば
 添ひ遂て不孝不孝を重ぬべしある良人を殺
 のも過世くらの悪報とありてかろを初まうても深ま
 晴且ぬ思ひ不慈不身へりぬ日ぞるき郭公血を吐く
 まむ小歎きしを妹入屢勵まさき勿体なくもこそ一
 夜み了みお城を締殺し松も直まぬその場にと繞て

死多んと為しりしを夫と妹と妹と妹と妹と是非なく那
 地を落延びて岩鞍山まで走り一時思ひがけるま
 典物が後辺ふ及りし草中より最も怪しき打拵しと
 顯り出たり松と木物をも言ひぞるき抱き去らんと成
 ろふ狭きとお有女の仕儀と取りつくそ邪子と成ると
 言ひつゝも雲を飛ばしと遊返其可きやとお有女の
 最終き傍の谷へ轉ぐ落着の水屑ととりゆきしを
 救ふは術さきこのそるに夫より此家へ候はば側室の
 名はと先理相漢持辭バ忽地殺せば言其威勢の凄し

きも基より棄し此身ゆゑ飾りてあつねども妹が
恨を報ひもせむ姉妹ともみかしくと命を捨ん
惜く候令此身を穢まとも須臾那取由形を折を
規ひ本望を達せんものと思ふまを返し側室となりて
時節を候ゆて居りうらみあひひがけなく風呂湯を
將とせお茶と顔見合せ不審賄れ移り典物よをよとの
多しおねふ不思議にお前が獲生の松子所くみ心も
繪きて再び思ひあぐらせむ候令確書でもお前の良夫悪も
情もあつねのいと妹が言活を道理と思ひ締殺する過も

取らばお前の恙なくわづらうて又這所でお目お察るゆ
其は縁一旦お前を殺し七母さんへ立る孝恨をせし
せしうあつねの死で再び獲生しお前の宛早離言をらむと
思ふ心と報しうを私を不便と思ひ返しお前のごとく女房に
のりてまゐるおひるら妹が贈言する典物を由形を見せぬ
付取ゆて家内の在金額さういお前と俱み走らんと
野ふがゆゑお其金も此やどののそらお奪ひ取りお前
腹し其うあで尚もお前のお心が解るべき傷で自害
あを起んと覚悟せしゆゑお今宵主の苗守を僕侍

庭先へ懸び出てお前の會へ嬉しきと又恥しきと
ませと男ぶぐやぶふ言ひくぬるねがむを推量し七念のそ
あつめて下まりませと泣り泣りきぬぐよ実を空す
交て言活巧ふ言ひくろむ奸智の閑し馬相
王が這所ご一生復命と思ひ込んぶる言の葉ふまご
欺く色く大六の心中更み酔るがごとく寐ぬ合せし庵下
より鈍る心の意馬心猿我より狂へ別室ふ再び縁を
結垣あつりよ見まろ白萩の花を咲ね今宵より色ぬ
出雲の神より月へのまごも雲とより雨とかなる夜の

楽も後の恨とよりみける

睡眠乍催を待合辻

第五十回 積悪自説く遠山路

余程の戸塚大六を賊婦烏羽王が絶言の鈍やふくび
欺く色誘ふ言の燈半木ぬ火の付安き確言のどく能言も
恨ももんや失て竟ぬ後寐の草枕露の漲りしを流ひ
より色を逢夜のたぐもとて主の崗守を見えまうして
逢ぬ忍び會ふやぶる大六公ぬ思入り彼烏羽王が去る
疾ぬ倦をひそく癖殺せん親の敵と一筋ぬおりの

文賢五輯の五

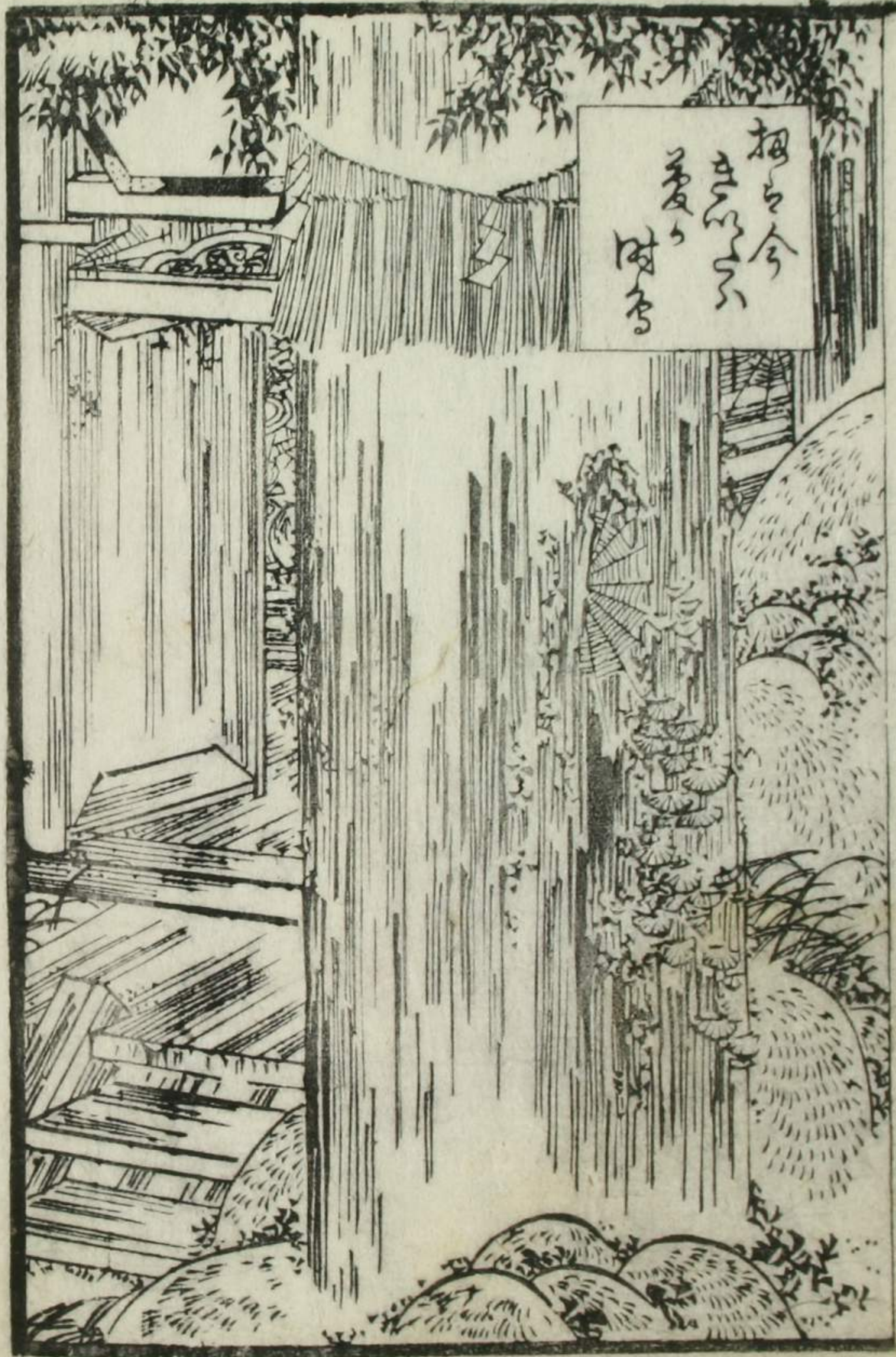
込んぐる過ちと言ひし詞の實変しうねど俺の思
美の養を渠まき先非と悔ひしとて我ぬらまびか
寄せ三百兩の金をき預けしうねの爲羽玉を殺せし連も
俺の預けし只夫のこみ預けしとて此家の主典物の渠が
妹の敵と言ひて遠うねうち爲羽玉が奈れもしうりて
殺せし其折家内の在金を残る方かく檢さしひわれ
の國へも逃延て以前のどく爲羽玉と夫婦しうりて
うねはふうねとをたれしとて今も今も今も今も
苦しみの似て苦しみのうね焼しき悲みの悲しみの苦し

やこむ川七樂とる人間事塞翁が好吏のこむ
のうの後の栄を見るまての身の卒防とを肝要るれ
獨り思按とむらむとむぞ爲羽玉もまき思ふや俺
日小風呂場にて那大六し出令しとき渠の此身の勝
うりと主ぬ報あむ大六が命の忽地失へるを夫とも
言ひて過し夜ぬ主の留守を幸ひぬ涼をみことよせ
獨り別室へのうりしぬ按ぬ遠りぬ大六が我身を討
と爲しうりしを口うら出次第言ひくうらぬ飯ぬこらぬ
順ふて三百金を預けしも基より典物ダ金うらぬ日

女賢五輯の五

外迹水を立退くとき有女太郎と侶俱ふ奪ひ去り
たる大六が夥へ立寄り金も是の今大六は渡せしとて
格別損と言ふでもあり夫のそとを典物の二世と突し
有女太郎と谷底はく蹴落せし眼を報ふ自死に
那大六が身を備りて竊ぬ主を刺殺させ澤成就せし
其うそで恨を晴すのそとを金も家財も皆我物
倘謬ゆて大六が主の爲に討つとも渠一人の科を
塗付け俺身ぬ過ちあるべしと思ふとを色ぬ見
せし外面の情行末のゆりぬる中へ最狭間

あきまよりけり話説分而顯宴あまき勇婦八代ハ
那三賢女と侶俱ふ瀨門の討隊ぬ捕欄ら且既ぬ
命も危ふりし錦の旗の奇端ぬあり不思及ぬ
其場を欣接しが要時暗夜ぬありしうらお梅を初ぬ
三個が行房を忽地見うらむ何所せまて尋ねんと
思ふに当へるけきども猶縁甚く敵ぬ追迫ら且再び
難及ぬ及べんと置ぬ任せて走るぬと公急くま思ひ
ぞもあつまぬ逆種ぬ踏怒ひあつむの壁を越へ山を越へ
げと更ぬ人家もく況て往來の人ぬと稀ぬ一個もあつ



梅と今
さくらさ
る友の
時を

さきび度そがこを何処どこと同とよよももなくなく憚くてもく強氣ごうきの八代やうだい
ゆき飢うもも勞うもも厭いとつつをを走はららぶぶ了りはは人里ひとへへ出でままるるひひ
ああるるままぐぐとと又また山徑やまのの分わりり七しち尚なほ戒かい十じゅう町ちやう々々性じやうくくややどどふふ但た
見みままはは往方ゆくのの傍かた小こ最さい些せ少すくなるなる辻堂つじだうありあり心こころももままくく
惶おそとと裡うちのの形勢かたじををききくく視のぞくく小家根よかねもも扉とびらもも雨風あまかぜにに
半はん分ぶんのの朽くててああるるままぐぐ尚なほ正ただ面めんのの本尊ほんぞんありあり軒のきのの掛かりり
扁額へんがくのの文字もじのの箱はこのの元もとままどどもも待合まちあひ辻つじとと書かくくうううう一いち其その
跡あと落おくく見みゆるゆるゆゆどど這こののたたららししきき堂どうくくままとといいははるるくく八代やうだいのの
何心なにこころなくなく我われとと入いりり四辺よへををけけくくぐぐ見みままるるままのの四よ方かたももああららうう

一間餘いっけんあまりり古ふるびび一いち繪馬えうまありあり挑灯てうていありありりりの本尊ほんぞんをを又また
よく見みゆるゆるゆゆどど造建つくりたりたり一いち地蔵菩薩ぢざうぼさつのの立像りゅうざう
なるなるゆゆどど備まへへのの是こゝなるなる辻堂つじだうのの待合まちあひ辻つじのの地蔵ぢざうとと木き樵しやう
草くさ薙ひまるまるものもののの連つれをを這こ所ところのの待合まちあひとと憩やすみ所ところででああららうう
介まをを見みるるにに此こゝ所ところよりより人里ひとへへ出でるるゆゆももたたやや遠とほくくららトト俺おれ身みもも
友ともをを見みるるゆゆももたたやや尋たずねね會あいいととままるる途みちのの待合まちあひのの名なのの辻つじ占うら
とと一いち霎はな時とき定さだままにに坐まをを休やすむむ里さとあるある方かたへへ急いそががんんとと破やぶれれ残のこ
アア一いち板いた塚づかのの這こひひああららううととままるるゆゆももたたやや先まみみささるる物ものわわれれのの
何心なにこころなくなく取とりりげげ見みままはは花田はな綾あやりのの風呂ふうりよ姿すがたへへ色いろをを込こめめ込こめめるる

一品の登時八代おのり申う這の是るるに此辺の程遠
 くの里人が此堂内休ミ一とまをたれて行物多しと
 打克頭其終み以前の野へ盡んとまるとまの小包
 よりとくと滑り汁の流し出て八代が自みくりとせ
 鼻み当り白ひ見まはゆる塩氣の白ひつる火儲へ
 是る小包のさせるものにはあぶらぎて登餉の料を携へ
 来て一まをたて戻り一餉るべ一我今肌ぬのをと一に
 候令主の腹もせよ這野あうりに捨ちて猪猴を
 食せんより此身の飢を凌ぎるべ此時主も本意を

べ一是もひのふ地藏菩薩の賜めて世の善巧方
 便うとうら戯れ門風呂敷の結び目解て推ひかけ
 果して一枚の竹の皮の五六の握吸と蔽み干菓の煮際
 煮かひの包をとり一と儲をと思ふと遠のきりしと假
 矢多う八代の腹も煮染も須史の間みけも残さず喰ひ
 盡せば腹心地よくあつたまふ初めを勞を覺へるをさうふ
 眠氣を僅にゆぞ傍の柱のこまき一ま我とあふふ睡を
 煮か俄み外面強がく人の争ふ声まをたばうら寝るま
 八代は目を見ひきて視るる其は時の程めり日の暮て

四方小暗き星月夜折しも扉口み来うるとそはるる果ふ
二個の武士一名ハ年紀五十才みちりく身の丈六尺をうりにて
面髭青く生むり顔も形容も醜相が右のみ白刃を引提
げ四下を以眼で徨と一片辺に一名の義少年歳ハ十九
十八才も前髪も剃短ぬ花の姿を紅の血み染るせし肩
先み受し一筋瘦のあつゆゑと見らふハ代まに駭きを所以を
あつらぬと辻堂なる板格子の間より形勢のよふと窺ふとら
當下少年ハ口惜氣ぬ刀の柄を握りつる苦しき呼吸の
下よりも念まる声とら立ておの是典物のりる果は物も

言つて後ろより欺し討と臆病至極此泡之助み其
あつらぬ仔細を稟せと詰寄するを這方み立し武
尾目み見り冷笑ひて苦しき悲しき一りも假令
岡ハと最早慥るぬ泡之助恁るうらぬ俺身の本
何と彼も打明て眞存の土産み言ひ听せん耳
澄して聴聞せよ元來某ハ下野の國庚申山の突に
住む山猫若無太と喚きてる盗賊の一子ハ
作と言ふ者ありしが今より廿余年以前録
隊の爲に俺が賊巢を攻破ら且父をたづら

文賢五輯の五

等々残るるく討まゝ一くど我のそ獨り討はせ
夫より諸國を經らざりて四五稔暮せり
若鞍衛守の武州秩父山の禁より若鞍の里小野
莊園のまゝの野持せり
人傳ふ聞へく或年若鞍の里小野の
寄せ七衛守が門生となりて夏基より隨身
わらざり尚折よくの你が父を殺して家名を奪
若鞍の郷士となり生涯榮花の身となりんと
俟てよ今より六稔前の秋思ふが終ふ計り
衛守と毒茶をの七竊くふ害一病死

ある素より湯守の渾家もみく其とき
俺が密謀とあるものうらねが餘の門生等と
你と家督と倣せりぬ十五の里下ね推見ゆ
後見しそ名を典物と更ぬより若鞍一家の莊
我物に似せども你と始終生並てはゆふ
たるゆ人教ゆも殺まべりしと今日ま七命
総角結せし甲斐の國府の浪人なる美山水門
於由と言へる弱女の美人の聞へりゆより
女賢五輯の五

よび寄せて俺が側女とせん心ゆゑ昔姻さまると偽り
此れど甲斐より途へ取りまごふ盛もさぬうち録をたす
内召と言ひ立て身を這呵まを連出せし人の竊め殺を法
伎倆の脛が潰れしころ儲を笑止る死がぬよと言ひ
呵とうら咲ひ一言話の頭つを大悪公最不敵に
見ふける必竟典物が悪りを聞て泡之助が田舎の
ぞや這馬いもどし盡さぬども丁敷とぬ浪のらむバ尚
巻の解分るを看てあらん

村田

貞操婦女八賢誌八編中

